

## 学会・シンポジウム報告

## 第39回国際応用動物行動学会の参加報告

新宮 裕子

北海道立天北農業試験場

第39回国際応用動物行動学会 (International Society for Applied Ethology, ISAE) が、2005年8月20日から8月24日までの5日間、神奈川県麻布大学で開催された。大会参加者は全体で約180人であり、そのうち日本人の参加者は約80人であった。今年の参加者は、例年に比べるとやや少なかったが、イギリス、フィンランド、デンマークを始めとしたヨーロッパやアメリカ、オーストラリアまた、タイ、インドネシアなどのアジアからの参加もあり、様々な国の人が参加した。本大会は「ヒトと動物の共生」をメインテーマとし、1「家畜福祉と家畜生産性・家畜健康性との関係」、2「ヒト-動物のつながり」、3「ヒトと野生動物との生活上の関わりからくる諸問題とその解決法」、4「飼育環境エンリッチメント」、5「Free Papers」の5つのサブテーマに分かれていた。大会はテーマに沿ってWood-Gush Memorial Lecture 1題、基調講演5題、口頭発表75題およびポスター発表49題から構成された。全体の日程および筆者が参加したシンポジウム・ワークショップは以下の通りである。

8月21日(日曜日)

- ・開会宣言
- ・Wood-Gush Memorial Lecture  
「動物における認知と動物福祉」 (Watanabe, S.)
- ・基調講演  
「野生および動物福祉にに基づいた“環境エンリッチメント”」 (Koene, P.)
- ・口頭発表・ポスターセッション (牛関連 15題)
- ・ワークショップ  
「泌乳牛の繁殖行動と問題点」

8月22日(月曜日)

- ・基調講演  
「ドーパミンとの関連：動物の常同行動はヒトの嗜癖のモデルになるか？」 (McBride, S.)
- ・口頭発表 (牛関連 3題)
- ・エクスカージョン

8月23日(火曜日)

- ・基調講演  
「高泌乳牛における横臥休息の必要性」 (Munksgaard, L.)
- ・口頭発表・ポスターセッション (牛関連 8題)
- ・バンケット

8月24日(水曜日)

- ・基調講演  
「家畜においてと場までの最大輸送時間」 (Cockram, M.)
- ・口頭発表・ポスターセッション (牛関連 12題)
- ・閉会

口頭およびポスター発表は、家畜の福祉と家畜生産に関する内容が最も多く、その他のテーマも含めて興味深かった発表内容を幾つか紹介する。乳牛と乳生産に関しては、搾乳のために放牧地を出て待機している時間の長さや乳生産量との関連について発表があった (Botheras, N.)。放牧地を出て搾乳までの待ち時間が長くなると乳生産量が下がるという結果であり、搾乳牛の飼養頭数が増えた場合には搾乳施設も短時間で搾乳が終わるように変える必要性が考えられた。牛舎関連では、フリーストール牛舎でのブリスケットボードの設置およびネックレールの位置を変えた場合の横臥休息位置の変化についての発表 (Takeuchi, M.) があった。子牛については、子牛の哺乳量および離乳方法の違いが離乳後の子牛の行動に及ぼす効果 (Nielsen, P. P.) や性別の違いおよび親牛と一緒にいた時間の長さが子牛の行動的な発達に及ぼす効果 (Lauber, M.) といった発表があり、子牛の飼養環境に対する関心の高さが伺えた。

牛の異常行動の一つに舌遊び行動があるが、若牛の舌遊び行動は、放牧地の状態にも依るが放牧されている若牛に比べてペンで飼育されている若牛に頻繁に見られることが指摘された (Ishiwata, T.)。また、馬の異常行動として見られるさく癖については、飼料の種類を変えてさく癖の起こる頻度を測定し、甘味飼料がさく癖を誘発する可能性があることを示唆した (Houpt, K.)。馬のさく癖と飼料との関係については、他の研究

機関から異なる意見が出され議論となった。

ヒトと家畜との関係については、馬に関する研究が6題と、他の家畜に比べるとやや多く、生産よりは乗馬などの使役動物としての役割が多いためヒトと関係が重要視されていることが伺える。幾つかを紹介すると、ヒトと母馬の関係が子馬のヒトに対する行動に及ぼす効果に関する発表があり、ヒトと接触経験のある母馬の子馬は、接触経験のない母馬の子馬に比べると、ヒトが接触するうちにヒトに対する逃避行動が減少し、サドルパッドを置かれてもすぐに馴れることが報告された (Henry, S)。数年前にも、本学会でヒトが直接子馬に触ることで、ある程度はヒトへの恐れを軽減できることが報告されたが、母馬とヒトの接触を見るだけでも同じような効果が得られることは興味深かった。また、乗り手の不安さが馬へと伝わる可能性についての研究があった (von Borstel, U. U)。馬の心拍数を指標に判断したが、結果にはばらつきがあり明確な結果は得られなかった。

筆者自身は、「林間放牧地におけるウマおよびウシのFeeding StationおよびFeeding Patchでの採食行動」という題名でポスター発表を行った。Feeding Stationや

Feeding Patch内での採食動作や移動といった採食行動の観点でウマとウシの採食戦略の違いを解析し、ウマはウシよりもより遠くへ広がって行動し、選択的な採食を行ったという内容であった。ポスターの中で、Feeding Station間の移動歩数からlog-survivorを用いてFeeding Patch内およびFeeding Patch間の移動を分けた事に関心を持たれたようだったので、Feeding Patch内の移動は採食のための移動で、Feeding Patch間の移動は移動のための移動だと考えていることを説明した。

今回の学会は物価の高い日本で開催されたこともあり、ちよつとでも旅費を安く済ませようと、ドミトリーに1泊した。他の人との相部屋は特に気にはならなかったが、電車とバスとタクシーを乗り継いで行った先は、山の中のバンガローでした。もちろん、近くにコンビニはなく、かなりの田舎で、東京にもこんな所があるのだと非常に感心した。普段住んでいる所も草原が広がる広々とした、田舎であるが、それとはまた違った風景の田舎でなかなか良かった。

2006年のISAEは、8月8～12日までイギリスのブリュッセルで開催されることが決定している。来年もぜひ参加したいと思う。

